2016年度 修了

青年期の自己形成に関する体験の意味づけ
－対人援助職を目指す青年の語りを通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
畑中　樹奈

本研究は，対人援助職を目指す青年を対象に，思春期以降のかかわり体験が彼らの中でどのように意味づけされ，自己形成に繋がっているのか，そのプロセスを明らかにすることが目的である。

青年期には「大人になること」が求められる。しかし，現代における消費社会や競争社会のなかで生きづらさを覚える青年の姿は多く指摘されており，彼らが一人の大人として自立し，自己を形成していくことは，決して単純な作業ではない。青年が自己の生き方を作り上げていくその過程には，先行研究のなかで多く指摘されているように，他者とのかかわりが大きな影響を与えると考えられる。

調査対象者となる大学院生の自己形成プロセスを明らかにするため，本研究では質問紙およびインタビュー調査を実施し，複線径路・等至性モデル(TEM)によって彼らの思春期以降のかかわり体験を分析した。結果から，彼らの自己形成に大きな影響を与えていたのは，ネガティブな思いを孕んだ自分自身，並びに自分をありのままに受け入れてくれる大人との出会いであったことが考察された。また，青年期における自立や自己形成が，親以外の大人とのかかわりを軸に為されていくだけではなく，その土台にある，親を中心とした思春期以前のかかわり体験が重要であることが示された。他者とのかかわり体験は，すべての時間や空間を経て，自己形成へと繋がっていることが確認される結果となった。